

モデル事業名	多様な主体との連携による京都西山フォレスト事業
活動団体名	にしやましんりんせいびすいしんきょうぎかい 西山森林整備推進協議会
ホームページ	http://www.nishiyama-shinrin.com/
所属/ 担当者名	長岡京市環境政策推進課 木本直樹
連絡先	(075)955-9542 kankyouseisaku@city.nagaokakyo.kyoto.jp
活動地域	きょうとふながおかきょうしにしやまちいき 京都府長岡京市西山地域

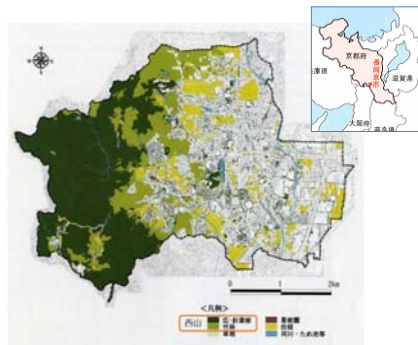
● 活動地域の概要

長岡京市は、京都市中心部から直線距離で約10km(鉄道で約10分)、大阪市中心部から直線距離で約30km(鉄道で約30分)に位置している。京都・大阪のベッドタウンとして1960～70年代に大きく人口が増加したが、近年は伸び率が低下する傾向にある。

長岡京市市域のうち、西側の山地である西山地域は市の面積の40%を占め、うち64%が雑木林、16%が人工林、20%が竹林である。市域東側の平坦地はまぼ都市的土地利用(宅地等)が占めている。西山地域に所在する浄土谷集落は、人口44名、18世帯で、かつては、林業が村の主な産業であったが、燃料革命や木材の輸入自由化等による木材価格の低下により、集落での山の維持管理はできなくなっている。また、西山の99%以上が民有地であり、所有者は約600名である。

西山地域に降り注いだ雨は、良質な地下水となって山裾から湧出し、市民の水道水や飲料水製造業等に利用されており、市の上水道の年間汲み上げ水量約480万tの多くを、西山の森林面積(約800ha 市内年間降水量約1,500mm)が、水源機能として果たしている。

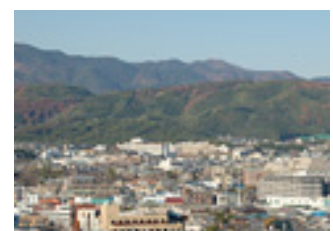
一方で、社会情勢や生活様式の変化により、放置された近年の西山は、生態系への悪影響や竹林の侵食などにより、森林機能の低下が問題になっている。



【位置図】



【荒廃する竹林】



【西山全景】

● 活動地域の課題

近年の西山は、社会情勢や生活様式の変化や林道等の基盤不足により、放置された状況であり、生態系への悪影響と竹林が侵食することなどによる水源能力の低下への対応などが喫緊の課題となっている。

協議会ではこれまでも、平成18年に策定した西山森林整備構想に基づき、地域協働のもと森林整備を進め、森林面積800haのうち、159haについて整備を行ってきたが、当該地域の森林の実に99%以上が民有林であるという状況を踏まえれば、今後も計画通りに森林整備が推進される保障はない。

したがって、これまで以上に幅広い主体の参加を促すとともに、次世代に向けた人材育成を図っていくことが必要である。また、施業技術についても、雑木林の施業方法が確立されていないことや水環境に着目し、より水源涵養機能を発揮される森林へと誘導するための新たな施業方法について、技術的な体系を確立していく必要がある。

● 活動の内容

・平成21年度

【活動①】ワークショップの開催と伐採木竹の利活用

森林や放置竹林の整備により伐採された木竹を資源として再利用する。現在は竹炭や土壌改良材としての竹チップ、間伐材は木質ペレットなどのバイオマス燃料として利用されているが、間伐木竹そのものを学校など公共施設で有効活用するための方法などを検討するための住民参加型ワークショップを開催する。

【活動②】西山ファミリー環境探検隊

次世代を担う子ども(小学生)を対象として体験型環境教育を実施し、四季を通して西山の様々な自然を体験することにより、環境に配慮した生活や行動ができる人材の育成を目指す。具体的な事業内容としては、自然観察会や川あそび、農体験、木工教室など。一昨年から地元大学生のボランティアが事業に参加しているが、今年度からは地元NPOと企業ボランティアが事業に参画し、事業にも間伐材や竹などを使った木工教室やおもちゃ作製を加えるなど、地域コミュニティによる体験型環境教育の実現に向けた取組みとして刷新された内容とする。

【活動③】新たな森林施業方法の実験

水資源が安定的に確保されるためには、森林の持つ水源涵養機能が十分に発揮されることが必要であるが、水環境に着目した施業方法については十分な研究がされておらず、また、技術的な体系付けもされていない。今回の提案活動は、今年度の森林整備計画の5ha以外に、0.5haについて従来から行われてきた施業方法ではなく、ワークショップで検討された水環境に着目した住民参加型の新たな施業方法を実験的に実施しようとするものである。

● 平成21年度

平成18年に策定した西山森林整備構想に基づいて森林整備と啓発事業を実行するとともに、今年度に「新たな公」によるコミュニティ創生支援モデル事業にあげた3つの活動についても以下のとおり実施している。

【活動①】ワークショップの開催と伐採木竹の利活用

独立行政法人森林総合研究所の意見を聴きながら、伐採木材の利活用と新たな森林施業方法についての現地ワークショップや視察研修会を開催した。地権者、企業、ボランティア等多様な主体から多くの参加があり、活発な意見交換がされた。整備により伐採された木は、今年度から、新たに美山の森林組合と連携し、薪として活用するとともに、市が行った環境都市宣言の啓発看板にも活用した。また、11月には新たな森林施業方法や体験型環境教育などの普及活動など協議会の取組みを紹介するパンフレットを作成し、京都環境フェスティバルや長岡京市環境フェアなどのイベントで配布し、啓発を図った。

【活動②】西山ファミリー環境探検隊

今年度に計画している4回の事業のうち、1回は雨天のため中止になったものの、2回については計画どおり実施した。多くの子どもたちとその親が参加し、参加者はボランティア団体や事業に参画した地元大学生と自然観察や竹炭づくりなどの様々な事業を行う中で、西山の自然の豊かさを体験し、自然環境を大切に作る意識の向上に繋げることができた。

【活動③】新たな森林施業方法の実験

11月1日に西山キャンプ場奥の森で、一般市民を対象とした森林整備ボランティアを開催し、160名の市民ボランティアの参加のもとで森林整備が行われた。新たな森林施業は、その場所を対象とし、一般市民ボランティアが森林施業のプロの指導もとで行った施業場所について、環境団体が下層植物などの環境調査を行い、最終的に森林組合が整備を行うといった工程により実施される。



● 今後の課題及び展望

・課題

森林整備により伐採された木は、今年度市が行った環境都市宣言の啓発看板への利用、竹はチップ化し、街路樹の雑草防除に使用するなど、新たな活用方法を実行したが、使用量は少なく、伐採木竹の有効活用方法が課題となっている。また、ボランティアも高齢化しており、森林整備活動を継続していくためには、若年層のボランティアを取り込んでいく必要がある。

・展望

里山としての復活を目指し、雑木林と人工林の間伐材を有効に活用することが必要である。そのためには、林道等の基盤整備が不可欠である。また、次世代を担う子どもたちに西山をフィールドとした環境教育を体験させるため、西山ファミリー環境探検隊を発展させ、小中学校との連携を図っていくことが必要である。